

# 韓国のまれびと説話

依田千百子

## 一 はじめに

日本民俗文化の中のまれびと信仰の重要性を指摘し追求したのは、折口信夫の不滅の業績である。折口信夫のまれびとについての見解は、その研究の随所に散見されるが、次の文が最もまとまつたものであろう。

まれは数量、度数に於いて尠いことを<sup>キサ</sup>斥すばかりでなく、唯一孤独などの義を第一とするものと考えることができる。(中略)

したくと思う。

ひとは人間の意味に固定する以前は、神及び其繼承者の意味があつたらしい。さうすると、まれびとは、來訪する者といふことになる。(中略)第一義では海彼岸<sup>カシガン</sup>—普通の意味では、これを常世と呼ぶ—から周期的に來臨し、古代の村々の生活を幸福にして還つて行く靈物を意味している。<sup>(註1)</sup>

つまりまれびととは、一般に異郷からやつてくる神聖な訪問者であつて、村里を訪ね、祝福を与える、立ち去つてゆくものである。このまれびとの觀念は日本の神話伝承にくり返し現われているばかりでなく、八重山のアカマタ、クロマタをはじめ東北のナマハゲにい

たる、日本各地の小正月や収穫祭の訪問者の習俗の形をとつて表現されることもある。

日本のまれびと信仰と海外の類似の信仰、習俗との比較研究は、岡正雄氏のメラネシアの秘密結社との比較<sup>(註2)</sup>を先駆として、大林太良、鈴木満男、上野千鶴子、伊藤清司氏その他多くの研究者によつて、すでに研究がなされている。<sup>(註3)</sup>筆者も以前韓国における仮面仮装の來訪者慣行について考察したがあるので、本稿ではこの觀念の伝承表現として、韓国のまれびと説話をとりあげその様相を概観したいと思う。

ところで、まれびと信仰の形態は極めて多様なため、ここではA・スラヴィークのまれびとに関する概念を参考として、①異郷からの聖なる訪問者が人間界を訪れる ②聖なる訪問者の人間界における一定期間の滞在と帰還 ③物質的・精神的な贈り物交換 の三つの構成要素を含んだものを「まれびと基本型」と規定したうえで、韓國の説話の中から特にこれらの三要素を備えたものをとりあげ、検討することにした。

## 二 まればと歛待説話

このモチーフはS・トンプソンの民間文芸モチーフ索引の「変装した神（聖者）が厚遇に対して報い、冷遇に対して罰する」に相当しそれにギリシャ神話をはじめ古典古代から現代にいたるまで多くの例がみられるものである。つまり村外から訪れた神を歛待した者がよい報償を受けるというもので、訪れた神を冷遇した者が罰を受けるという隣の爺型に発展する場合もある。韓国ではこれは三つのタイプに分けることができる。

### (1) 饗応・祝福型

このタイプは訪れた旅の僧、或いは道士を貧しい夫婦がもてなし、その返礼として富や幸福を得るというものである。次に挙げる朴榮澹氏の紹介している「仏のおくりもの」という話はこのタイプの代表的なものである。

### (2) 広浦伝説

これは旅人や旅の僧侶に飲食を饗応した老婆（人）は津波から助かり、老婆の話を聞かなかつた者は死に、村は陥没して海になつてしまつたというものである。

今のは廣浦は小さい漁村に過ぎないが、五百年前までの廣浦は大きいい町であった。その時の廣浦には浮浪放蕩の青年が多く、町には一人の老婆が酒幕を設けていた。或る日のこと、葛巾野服の一老翁が老婆の酒幕を訪れ饑渴を訴へ乍ら飲食を請うた。老婆は慈悲深い人であったので、老翁の口腹に任せて種々と食べものを与えた。翁は一文も金を持たないと言つたが、「餓えた

んも僧に与えた。あくる朝、僧の態度は昨夜とはがらりと変り慈悲とやさしさにあふれていた。僧は夫婦の心のこもつたものに深く感謝し、お礼に何かを報いたいといって、産湯につかつた水を庭の真中にそそぎ「自分の去つたあとここを掘るとどんな病いでも治せる靈泉が湧き出るはずだ。その薬水を売りさばけばあなたがたは金持になるだろう。しかし、泉に絹糸を落すと薬水の効能がなくなるから気をつけるように」といつて立ち去つた。夫婦は僧に言われたとおりにして大金持になり、靈泉を村人に与え都に移り住んだ。村人も靈泉で金もうけが出来たので、泉のほとりは遊び場に変り、一人の男が酔つて琴を抱いたまま泉に落ちた。すると琴糸が絹で作られていたので、僧の予言どおり、泉の水は効力を失つてしまつた。〔註6〕

（全羅南道康津郡道岩面）

人を助けるは善いことです。食価など取る考へは毛頭ありませぬ」と婆さんは答へた。翁は暫らく思ひ沈んでいたが、婆さんに向つて斯う言った。「これから三日間の食糧を準備して置いてもしあの山の墓の前に立つて童子石像の眼に血が流れ出たら直ぐその食糧を携へて高い山の上に避難しなさい。さうしないと大きい禍ひに遇ひませうから」。これを言ひ遣して翁はどこへか立ち去つた。老婆はそれより朝夕童子石像の眼を調べに行つた。そして青年達にも避難の準備を勧めた。しかし惡少の輩が老婆の話に耳を傾ける筈はなかつた。それのみか、彼等は老婆をからかつてやらうと夜中密かに往つて石像の眼に血色の染料を塗つて置いた。翌朝、それを見た老婆は惶惶として食糧を携へ山上へ逃げた。悪少年はしめたと許り老婆の家に駆け入り、その酒甕を開けて飲めや踊れやと乱痴氣騒ぎを始めた。

その時突然海溢みうちが襲つて来て広浦は瞬く間に海と化し、広浦は陥没してしまつた。今の広浦の大河にはその時の陥没に因つて生じたものであり、今の広浦はその後新しく建てられたものであるといはれてゐる。<sup>(註7)</sup>

(咸鏡南道咸興郡西湖津内湖)

これと同種のものは咸鏡北道明川、咸南高原、平北鉄山、黃海甕津、京畿開豊、同長湍、忠南大田、慶北奉化、全北沃溝等にもあるが、老翁(註8)が道士、僧と語られることが多い。これはまた「村の陥没型」<sup>一</sup>昔話としても広く語られているものである。

これはケチな長者が僧侶に布施を拒んだために没落してしまい、その家が池になつたというものである。

高麗の頃、公州郡州外面のいま龍池といわれる池の場所に、一人の大変な長者が住んでおり夫婦仲よく暮らしていた。ところが夫は大変なけちんぼうであつた。ある夏の夕暮に一人の老僧が訪ねて来て、布施を頼んだ。長者は「日も暮れたのに何だ、明日來い」と断つた。翌日の昼、例の老僧がまた布施を乞いに来た。長者は裏庭に集めておいた牛の糞を「シャベル」すくつて僧の米袋に入れた。老僧は丁寧に挨拶して帰りがけに「お宅は近いうちに滅びるでしょう」と言つて姿を消した。老僧が去つて間もなく、いきなり空に黒雲が現れ、豪雨が何日も昼夜降りつづけ、長者の家は水に沈んで池となつた。今日でも、雨の降る日にはこの池に芝が浮んだり、長者の妻の機織りの音が聞えたり、池の底の器が見えたりするといわれる。

(忠清南道公州郡)

この伝説はこの他平安北道鉄山郡、同江界、咸南高原、同定平、京畿開豊、同長湍、江原江陵、忠南公州、同大田、全北沃溝、慶北奉化等から報告されている。また池の発生というモチーフを伴つてはいないが、この形式の伝説と共に内容をもつてゐるものに「追い出された家主、欲ばり長者型」<sup>二</sup>昔話がある。<sup>(註9)</sup>

以上の三形式の韓國のまればと説話は、慶尚南道と濟州島を除く韓國全土に分布しているもので、わが国の『常陸國風土記』の福慈・筑波、『備後國風土記逸文』の巨旦将来・蘇民将来の話や弘法清水・大藏の客・猿長者・笠地藏などの伝説や昔話と多くの内容的類

似を示している。しかし(2)、(3)形式のような、まれびとに飲食や布施を拒否したためその村が陥没して海になつたり、池が発生したという話は日本には比較的少なく、これは韓国に特徴的な話であると思われる。また日本のまれびとの代表が弘法大師であるのに対し、韓国では僧侶とか道士になつてゐるが、これはタイ、ラオスなど東南アジアにおける同種の説話の訪問者が、お釈迦様・シャカになつて(註11)いることを考え併せると、これらの話が仏教徒によつて大いに利用され、かつ広められたことが想定される。

また(2)形式の一部で、まれびとの訪れる日が特に「秋夕」と語られているのは極めて注目すべき点であると思われる。秋夕は半島の中部以南で旧八月十五日に行われる、收穫祭と祖先祭を兼ねた一年を通じての最大の祭りである。この事実は、韓国のみればとも仏教の影響を受けて僧侶、道士となる以前には、日本の風土記や万葉集に出でくる如き、新嘗の夜の聖なる訪問者と同様の性格をもつものではなかつたかといふ疑いを起させる。次の『三国遺事』の車得公に関する記事は、明らかに女性提供をともなうまれびと歓待説話を一異形と考えられるが、この訪問者は、農作物の豊穣をもたらす(或いは左右する)力をもつものとみなされている。

新羅の文虎(武)王の庶弟である車得公が武珍州へ現在の全南光州へを微行したとき、州の官吏安吉が、旅人を普通の人物でないと見抜き、自分の家に迎えて厚くもてなした。夜になると妻妾三人を呼んで客と共に寝することをすすめたところ、そのうちの一人が感じた。後、車得公は王になつてから安吉のこのもてなしに対して、星浮山の下の地を彼の燃料田として与えた。

この田が豊作であれば武珍州も豊作となり、そうでなければ武施を拒否したためその村が陥没して海になつたり、池が発生したと

(註14)

この記事に、「この田が豊作であれば云々」をあつて「水田」と

珍州も豊作とならなかつた。

表記されていないことは興味深い。つまりここでいう農作物は水田で耕作される水稻・稻という限定ではなく、田、すなわち畑で耕作される雜穀類を指している可能性が強いことを示している。これは日本におけるまれびと説話や習俗が、雜穀、なかでも特に粟(作)と結びつく傾向が強いという事実を想起させるものであり、さらには韓国的新年或いは收穫祭の仮装訪問者慣行が、元來韓国の稻作＝畑作複合文化と結びつくという結果ともうまく符合する。(註15)

ところで、以上の韓国の三形式のまれびと歓待説話を通して語られているテーマは、「訪問者と主人の間の贈り物交換」についてであるということができる。(1)の饗應・祝福型では主人側からの宿と飲食の饗應に対する返礼として、訪問者である旅の僧は万病に効く薬水(富)を与えており、ここでは相互間の正常な贈り物交換が語られている。次の(2)の広浦伝説と(3)の長者没落伝説では、「幸福を与えるもの」であると同時に、「災禍をもたらすもの」でもあるまれびとの両義性が強調されている。なかでも(2)では、訪問者に飲食を饗應した老婆のみが救われ、他の罰せられて津波にあつて死んでしまうというように、隣の爺型への発展がみられる。また(3)の長者没落伝説においては、僧に布施をしなかつた長者は没落し、その家は池になつてしまつ。

またこの三形式を通して訪問者に食を与えることが重要なテーマになつているが、これは松村武雄氏がはやく、この型の説話において

て神を宿泊させることよりも、<sup>(神々に)</sup>食物を与えるということが重要であつたらしいと指摘されていることが想起される。

では聖なる訪問者に対する食物の贈与と、先の韓国(2)、(3)タイプのまれびと説話のテーマとの関係はどのように考えたらよいであろうか。これについてはすでに大林太良氏が、長者の没落に関して指摘されているように、

僧侶への布施の拒否は人間社会における聖と俗の間の正常な交換関係の攪乱である。つまり俗人は僧侶に布施(食物の贈与<sup>〔註17〕</sup>筆者註)をする代償として、僧侶あるいはその背後の超自然界からの祝福(幸・豊穣<sup>〔註18〕</sup>筆者註)が期待できる。しかしこの正常な交換の秩序が破られたとき、長者は没落しなければならなかつたのである。<sup>〔註19〕</sup>

即ち(2)、(3)では聖と俗の間の正常な相互的贈物交換の秩序の破壊が語られていると考えられる。人間社会の秩序<sup>〔註20〕</sup>文化の破壊の結果は自然への逆転である。村が陥没して海となったり池が発生したといふのは、村や家が破壊され、海や池<sup>〔註21〕</sup>自然へと逆転したこと表現しているのであろう。

### 三 周期的まれびとの伝承

#### (1) ヨンドン・ハルマン

慶尚道地方を中心とした韓国南部の農漁村では二月一日には「靈登媽々が天から降りる」といて、禾積式の立竿を立て、禁忌のもとに五穀飯・蔓芭餅や水などを供えて風神ヨンドン・ハルマンを迎える。

祭る。

ヨンドン神は一月一日に降ってきて二月二十日(あるいは十五日)に帰るといわれている。この神は慶尚道では一般に迎燃婆<sup>〔註22〕</sup>とよばれ、老女であり、娘を連れて来たり嫁を連れて来たりする。娘を連れて来る年には、娘の着物をなびかせて綺麗に見せるために風が吹くので、農作に悪く、嫁を連れて来る年は、びしょ濡れにして醜く見せるので雨が降り豊作になる<sup>〔註23〕</sup>。このように「母子(娘・嫁)」神の形をとつて来臨するヨンドン・ハルマンは、現在では風雨神としての性格が強調されてはいるが、その本質は穀神的な天上の豊穣の女神であるとみなしてよいであろう。ヨンドン・ハルマンは天上からこの世に豊穣をもたらすために毎年時を定めて訪れる、穀神的なまれびと神であると捉えることができる。この神は顯著な垂直的神出現表象をとるまれびとの類型の一つとして極めて重要なものであると思われる。

#### (2) 済州島のヨンドン・神の伝承

濟州島では古來二月一日から十五日にかけて燃燈或いは迎燈神に対する盛大な祭儀が行われているが、この祭りが特に「endonngson-mazi」と呼ばれていることは興味深い。ヨンドンはこの神の名、「ソン」は「お客」の意味であるが、これは張籌根氏によると現代の常用語ではなく、老漢学者のことば遣いか、時代劇のせりふのみ出できそな古雅な感じのことばであるといふ。<sup>〔註24〕</sup>「マジ」は「迎える」の名詞形であり、逐語訳をすると「迎燈客迎え」となる。従つて年に一度、二月初旬の来訪客に対する祭りとなるが、濟州

語の「ソン」はわが「客人」「まれびと」のニュアンスとまさにぴつたりの語であるといえよう。

濟州島のヨンドン神に対する伝承には異伝が多く、先述の半島南部のヨンドンハルマンと同種の伝承もあるが一般にこの神は二月一日に島を訪れて、わかめ・あわび・さざえなど海女の採取物の種子を持ちて豊穣を与える十五日にまた本国へ帰つてゆくと信じられている<sup>(註22)</sup>。次に挙げる玄容駿氏の紹介した例は、最も筋が明瞭であり、かつ内容的にまとまったものである。

昔濟州島翰林邑水源里のある男が激浪のため漂流して「一目人島」に着いた。この人たちは人間を見ると、直ちに殺して食べてしまふので、水源里の男が着くと、相變らず集つてきて殺そうとした。そこには、すでに漂着した同郷の人があつたが、この人が彼を助けて帰してやり、その身代りとして殺された。この同郷の人がヨンドン神となつて一年に一度一目人島からやつてきて、海女に豊穣を与えるのである。<sup>(註23)</sup>

ここに語られている海の彼方にある「一目人島」は人を食う奇人の國で、一度行けば死ぬ國であり、そこで死んだ人が神となつて一年に一度この世を訪れて人々に豊穣を与えて帰つて行くと信じられているのである。つまりヨンドンは海の彼方の聖域から時を定めて來訪し、この世に豊穣をもたらすまれびとであると捉えることができる。但し、この伝承によると、ヨンドンは死者ではあるが、別に血縁的な祖先であるとは考えられていない点は注意すべきである。これはわが国のまれびとや常世國、根の國、沖縄のニライ・カナイなどの信仰と極めて顯著な類似を示すものである。ところで、

これらの周期的まれびと伝承の分布状況をみると、慶尚道を中心とした半島南部の一角と海岸地帯、及び濟州島に片寄つて分布しており、最初に挙げたまれびと欲待説話の分布に対しても、互いに補完的関係にあることを示している。このような分布構造が一体何を意味しているのかの追求は、今後韓国さらに東アジアのまれびとに関する多くの研究の成果と併せ検討したいと思う。

#### 四 有害なまれびと、疫病神の伝承

来訪者が人々にとつて有益なものである場合と、その逆に有害なものである場合が考えられる。ここでは特に韓国の有害なまれびと——多くは疫病神がこれにあたるのであるが——に関する説話をとりあげることにする。

##### (1) 処容説話

処容は東海竜王の息子で憲康王に従い京に来て王政を補佐した。王は美女を彼に娶らせて國にとどめた。処容の妻が非常に美しかったので、疫病神が恋慕して人間に変身して夜やつてひそかに処容の妻と寝た。処容が外から家に帰つてみると二人が寝ていた。彼は歌をうたい舞を舞いながらそこから出いでた。歌を聞いた疫神はもとの姿になり、跪いてあやまり、「誓つて今後は、貴公の姿を描いたものを見れば、決してその門の中に入りません」といった。これ以来新羅の國の人々は処容の姿の絵を門に貼つて、邪鬼を追い払い、幸運を迎え入れるようになつた。

この処容説話は非常に興味深い種々な側面をもつたまればと説話をである。ここには二人のまれびとが登場している。その一人は東海から来臨した処容である。彼の父東海竜王は『三国遺事』によると、大王に祟りをなし、望海寺を建てるこことによつて鎮められた荒ぶる神である。<sup>(註25)</sup> その息子処容も『京都雑誌』や『東国歲時記』など他の伝承によると、人々に畏れられる羅喉神とみなされている。これは彼自身も邪惡な神としての属性をもつた存在であることを示している。<sup>(註26)</sup> しかし前掲の記事の如く、彼は王から美女を与えられ（女の贈物というのは主人から客への最大の贈与であるといえる）、その結果國土に留まり王政を補佐し、國家の福祉、疫神駆除、門神として除災招福など、人間に福利をもたらす存在に転換したのである。

他の一つは疫病神であるが、彼はいわば有害なまれびとである。疫病神は処容の妻という供犠（女の贈物）と処容の歌舞の献納という二つの方法によって饗應され、その返礼に処容の形容画を門に貼るという「除疫の呪法」を授けて退散している。処容説話が一部の研究者によつて外者欲待説話とみなされるゆえんである。また一方この伝承は、日本の蘇民将来伝承において、蘇氏将来の饗應に対し武塔神が、茅の輪を腰の上に着ける疫病を避ける呪法を受けた話と非常によく似ている。来訪神が有害なものである場合、人々は供儀（といふ贈り物、ここでは女と歌舞）を与えることによつて、それを「幸」「福利」をもたらす神へと、即ち荒ぶる神を守護神に交換せしめるのである。このように大分複雑な形になつてゐるが、この処容説話からわれわれは神と人間との間の相互的な贈り物交換という、まれびと説話の基本的図式を読みとることができる。

この処容説話は非常に興味深い種々な側面をもつたまればと説話である。ここには二人のまれびとが登場している。その一人は東海

(2) 済州島の疫病神ヨンガムの伝承  
済州島のヨンガム（別名トッヂエビ）は処容説話の疫神とよぶ似ている。これは叙事巫歌「ヨンガム本解」として神房によつて伝承されており、多くのバリエーションがある。ヨンガムは「あちだけ残った破れ笠、襷だけ残つたぼろ着物で、ひと指尺に足らぬ煙管のいでたち」で、ソウルで悪事をしたため流罪に処せられて済州島にやって来たという異装の來訪神である。彼は女性を好み、海女の疫病がヨンガムが憑いためだと判断された場合、「令監遊び」という巫祭が行われる。女性に憑いた弟ヨンガムを、二人の兄ヨンガムがたいまつを手に持ってやって来て連れてゆく模擬劇が演じられ、さらにその退去を確実にするために「トチエビ退送船」という藁の小舟に各種の供物を載せて海上に流す。これは明らかにヨンガムが一種のまれびとであることを表わしている。但し彼は有害なまれびとである故に、飲食物の供應を受けた後海の彼方へと送られるのである。ヨンガムは仮面で表わされる神であり、破れ笠をつけた異装の神と語られているが、その異形性は、日本のまれびとの蓑笠姿と対応するものである。<sup>(註31)</sup> 蓑笠をつけることはスサノオやスクナヒコなどをはじめとする日本のまれびと神の重要な属性であった。

以上、韓国のみればと説話をいくつかの形式に分類してその様相を概観してきたのであるが、それらの全てにわたつて語られているテーマは、神と人間、聖と俗、自然と文化、異郷とこの世との間の贈り物交換についてであつた。但し、動物と人間の間の贈り物交換については、韓国の場合は、この形式の伝承には認められず、動物報

恩譚の形をとつて語られているのは興味深いところである。  
〔註32〕

また神を迎える（請神）、饗應し（媚神）、神や祖先からの祝福が語られ（神託・コンス）、再び神や祖先が天上や彼岸へ帰還する（送神）——これは天上界の観念の発達した韓国シャマニズムの神祭りの基本的構造であり、またこの構造は、本稿でとりあげたまれびと信仰の基本的構造とも異なるものではない。しかし本稿で考察した限りでは天上界からこの世を訪れるまれびとは、ヨンドンハルマン一例のみで、他はすべて水平的異郷からのまれびとであった。つまり天上からのまれびとに関する伝承は、基本的まれびと説話の形では朝鮮においては発達していないという結果を得たのである。確かに一部の巫歌、例えば餌詞では、天神・天下宮堂七星が、人間世界を顧みるために地上に下りて来て、日が暮れて梅花園梅花夫人の家に泊り同衾する。夫人は先門、後門の双子を生み、兄弟は天上界の父を訪ね、先門は大韓國を後門は小韓國を司ることになるストーリーが唱われている。同種のものに濟州島の天主王本解があるが、両者いすれにも、本稿であつかったようなまれびと説話の主要テーマである神と人との間の贈り物交換の要素は欠けているのである。これはスラヴィークのいう贈物交換を欠如する神聖な訪問、つまり彼のまれびと基本型-I(a)にあたり、本稿の基本型とは異ったタイプに属することになる。このように贈り物交換を含む最も基本的要素から成る韓國のまれびと説話の神出現の方向が、顯著な水平性を示していることは、やはり看過するほどの興味ある事実である。  
〔註33〕これは日本の「まれびと」や「みこともや」など聖なる訪問者の問題を考える場合、一つの示唆を与えるものではないかと思われ

る。言及せねばならない多くの問題が残されているが、それらについては他日を期し、本稿を日本と韓国の神聖な訪問者問題研究の第1歩としたい。

〔註1〕 折口信夫「日本文学啓蒙」上代日本の文学『全集』十一  
卷一九五五年三二六—三二七、この他「古代研究」『全集』

一一三卷一九六五年、「妣が國へ常世へ」一九一九年、「古代生活の研究——常世の國——」一九三九、「國文学の發生〔第三稿〕」一九二七年、「常世浪」一九三八年  
〔註2〕 岡正雄「日本文化の基礎構造」『日本民俗学大系』2 七  
一九、一九五八年

〔註3〕 大林太良「東亞における新年の來訪者たち——東亞におけるある文化複合の一侧面」『日本歴史』第二三六号、一〇五一一一二一九六八年、「民族学から見た伝説」『国文学解釈と鑑賞』三一卷一三号1五一三〇一九六六年、鈴木

満男「マレビトの構造——東アジア比較民俗学研究」九五一九七四年、上野千鶴子「異人・まれびと・外来王」『現代思想』vol.一二一四七六一九八一九八四年、伊藤清司『中國民話の旅から』九一六四一九八五年  
〔註4〕 依田千百子「朝鮮の稻作儀礼——その類型を中心として——」『民族学研究』三一一一一・七一一三七一九六六年  
〔註5〕 Slawik A., Zum Problem des "Sakralen Besuchers, in Japan, Sonderdruck aus: Ostasiatische Studien, Akademie-Verlag, Berlin 1959 「神ぶらう考」——日本に

おける神聖な來訪者」の問題について一住谷一彦 クライ  
ナー・ヨーゼフ(訳)『思想』No.六七 一九三一—一〇 一

九八〇年参照

(註6) 朴榮藩編『韓國の民話と伝説』二二七六—二七九 一九七五年参照、このタイプの説話にはこの他「天子峰のいわれ」がある(同『韓國の民話と伝説』4103—1105 一九七五年)

(註7) 孫晋泰『朝鮮民譚集』六一一六二 一九三〇年

(註8) 崔仁鶴『韓國昔話の研究』三三三 一九七六年

(註9) 崔仁鶴『朝鮮伝説集』四七一四八 一九七七年

(註10) 崔仁鶴『朝鮮昔話の研究』二一四一二五 一九七六年

(註11) 大林太良『民族学から見た伝説』『国文学解釈と鑑賞』三一卷一三号三〇 一九六六年参照

(註12) 朴洪根『韓國伝来童話』一九七〇年 田坂常和『韓國の民話』一二四 一九八〇年

(註13) 『万葉集』卷十四の東歌 烏鳥の葛飾早稲を贅すとも彼の愛しきを外に立てめやも(三三八六)、誰ぞ此家の戸押ふる新嘗忌にわが夫を遣りて齋ふこの戸を(三四六〇)の二首によつても明らかである。

(註14) 『三国遺事』卷一紀異二 文虎(文)王法敏の条

(註15) 大林太良『日本神話の起源』二〇〇—二〇四 一九六一

(註16) 依田千百子(註4)に同じ一三一

(註17) 松村武雄『外教款待説話』『民俗學論考』三六五—三九

○ 一九三六年

(註18) 大林太良『神話と民俗』一三六 一九七九年(長者の没落—日本と朝鮮の伝説の類似と相違—)『正論』四八号六六二一卷一号一〇三 一九三六年 張籌根『韓國の民間信仰』論考篇二一九 一九七三年参照

(註19) 三品乾英『古代朝鮮の祭政と穀靈信仰に就いて』『史林』一九四 一九七七年)

(註20) 依田千百子(註16)に同じ

(註21) 張籌根(註19)に同じ二二三

(註22) 玄容駿『古代韓民族の海洋他界觀』『柳田國男研究』7

七四、一九七四年

(註23) 玄容駿(註22)に同じ『濟州島のヨンドン巫儀』『韓國民俗學』創刊号 二七一—三五 一九六九年

(註24) 『三国遺事』卷二 処容郎 望海寺条

(註25) (註24)参照

(註26) 子供の年が羅暉直星に当ると芻靈(ゼウン)を作つてそ

れに子供の着物を着せ、その頭部の中に銅錢を入れて姓名、

生年の干支を書き正月十四日夜道端に捨て、その年の厄を防

ぐ。また芻靈は新羅の憲康王代の「処容」に始まるという。

(註27) 金東旭『韓國歌謡の研究』一三一一三二 一九六一年

(註28) 『備後國風土記逸文』

(註29) 玄容駿『濟州島の民話』二三一—二二二 一九七六年、

張籌根(註19)に同じ三七三

(註30) 金榮敦・玄容駿『濟州島の巫堂賽神遊び』三五九—三八

(註31) 依田千百子『朝鮮民族文化の研究』九三 一九八五年参照

(註32) 依田千百子「朝鮮の山神信仰(=狩獵民の山神及び朝鮮の  
狩獵民文化」『朝鮮学報』三五一四二

(註33) 赤松智城・秋葉隆『朝鮮坐俗の研究』上一二八一一三二  
一九三七年

(註34) (註33)に同じ 四六〇一四六六、秦聖麟『濟州島の巫歌』  
一八七一一九六 一九六六年

(よだ ちほこ・郡山女子大学)